

## 林木遺伝資源の「見える化」について

### 1. 林木ジーンバンク事業

林木ジーンバンク事業は、1985年から「育種素材の供給源の確保」、「絶滅に瀕している種の確保」等を目的に、遺伝資源としての林木を収集・保存する事業で、種子や花粉による保存のほか、約2万6千系統の樹木そのものを増殖して保存園などで保存（成体保存と言う）しています。将来にわたって有用で貴重な林木遺伝資源を保存し、新品種の開発や科学技術の発展に寄与する研究材料として利用されるためには、遺伝資源が戦略的に収集・保存されていることが求められます。このため、これまでに成体保存されている遺伝資源と対象種の分布域との比較を行い、成体保存の少ない地域をGIS技術により地図上で可視化し、今後、収集・保存に重点を置く必要のある地域の「見える化」に取り組んでいます。今回は、日本の主要な広葉樹であるブナとケヤキの事例を紹介します。

### 2. ブナ、ケヤキの収集・保存状況

ブナとケヤキの分布域は、環境省が実施した植生調査データと巨樹巨木データから作成しました。両種の分布域と成体保存されている系統の収集地点とを重ね合わせた結果、ケヤキは分布域を網羅するように成体保存されているのに対し、ブナは北海道・東北に偏っていることがわかりました（図）。今後のブナの成体保存は、南東北から長野県・岐阜県の北部にかけての地域や温暖化の影響により消滅が危惧されている西南日本の小集団から行うことが重要です。

林木遺伝資源の「見える化」は、効果的な収集・保存計画の策定に活用できるだけでなく、一般に広く公開することで、利用者が試験研究に用いる遺伝資源の来歴を地図上で具体的にイメージできるようになり、利便性の向上にも寄与するものと考えています。

（遺伝資源部 探索収集課 山田 浩雄）

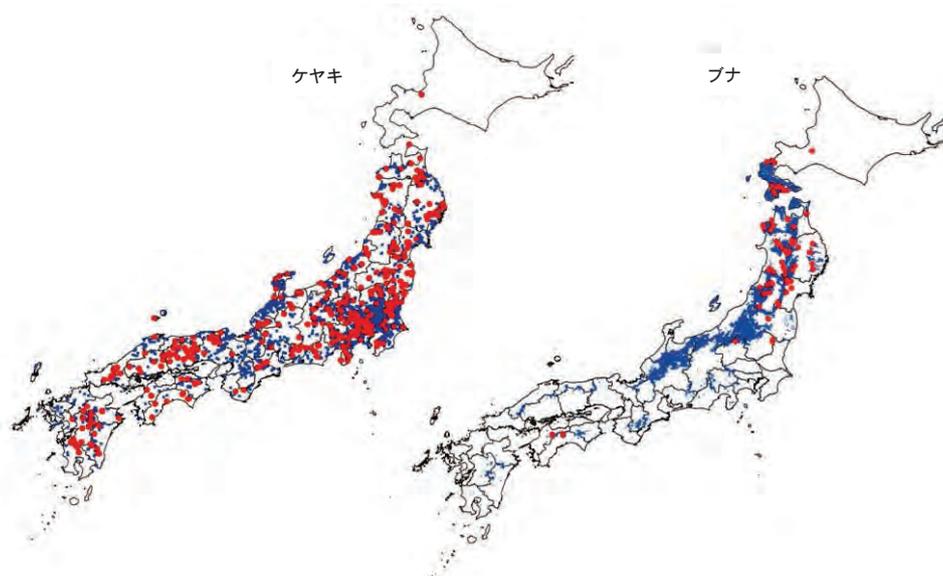


図 ケヤキ（左）およびブナ（右）の分布域（青）と成体保存されている系統の収集・保存地点（赤）

ケヤキは分布域を網羅するように収集、増殖して保存されているのに対し、ブナは北海道・東北に偏っています。